目次
総合研究所感二題 1
真宗・総合・近代そして歴史学 2〜3
北米仏教学資料収集考 4〜5
昭和58年度「一般研究」選考結果 6
Committee on Overseas Buddhist Studies 7
大蔵経学術用語研究の現況 8

大谷大学真宗総合研究所
研究所報
No. 6 1983. 2. 20

総合研究所感二題

大谷大学教授 山本唯一

本研究所は綿密な企画・構想と準備のもとで設立された。「真宗」なるものの信仰やその歴史的展開は勿論のこと、その社会的機能や形態など、もろもろのことを総合的に研究しようというのである。発足してから2年、的確な計画と事務処理によって運営されてきている。実際の研究においては、指定研究をはじめ幾つかの一般研究が研究者の努力によって積みかさねられてきた。その成果は近く公刊され、研究者の間で高く評価されることであろう。58年度に関しても、すでにいくつかの研究の採択が決定している。第3年度を迎えてますます力強い活動がなされようとしている。同慶の至りに思う。

ここで真宗総合研究についての一二の私見・希望を述べてみたい。一つは「総合研究」についての長期的な総合計画である。総合研究においては真宗を中心としつつ、その周辺の関連事項や事象も研究対象とされる。仏教・宗教・哲学・倫理・社会、さらには教育・歴史・文学等々である。語学も心理学も音楽・美術なども当然関連してくるであろう。政治・経済とても同様である。周辺の研究なしに、真宗の実態や今後あるべき姿の考究はなしえないであろう。現に本研究所にあっては種々の角度からの研究がなされている。勿論比較的長期の展望と計画をもった指定研究もある。一般研究の場合とて、研究者自身においてはライフ・ワークの一端を研究するということであろう。それらはそれらとして重要であり、一つの計画性をもってはいる。けれども研究所の研究としてみるとき、ややもすると単発的だという印象を受けないとはいえない。研究所としては大きな具体的な研究課題を考え、5年・10年の長期的計画のもとで一大研究事業が推進されることが望ましいと考える。

いま一つは基礎的資料の研究と公刊である。研究所自体として資料蒐集につとめるべきことは、柏原祐泉氏が本紙第3号で提唱しておられた。もっともなことと思う。本学図書館にも貴重な資料が数多く収蔵されている。そしてそれらは、従来すでに先学者たちによって研究・調査され、すぐれた論考も多々発表されている。けれども大々的な本格的な調査・研究はいまだしの憾がないわけではない。たとえば、まず宗祖親鸞の種々の著述に関する基本的な資料的文献的研究である。また「粟津文庫」などの総合的な研究も必要であり、それら資料の公刊もなさるべきであろう。「チベット大蔵経」をふくむ大蔵経の総合研究などは夢物語に近いものであろうか。大学という組織は、研究体制としてはまことに脆弱である。研究室とて同様であろう。その点、研究所は研究の組織体そのものだということができよう。貴重資料の公刊は、いままでのところ、ときに大学が、ときに個人が手がけてきて立派なものを世におくり出してきたことであるが、今後は研究所においてなされることが期待される。

なお大学が社会に対して開かれた大学であるべきように、研究所もまた広く開かれた研究機関であるべきであろう。そのため積極的に、まず地域社会に対する公開講座的なものが、将来実行にうつされるべく検討されるものと信じている。

『真宗総合研究』
研究会報告

真宗・総合・近代

日　時：昭和57年11月30日(火) 16時10分
場　所：研究所会議室

一

真宗総合研究所が出来て2年になろうとしている。また真宗総合研究「近代における真宗の展開」が始まってすでに7年になるかと思う。そうしたいま、研究所の周辺には、「真宗」・「総合」・「近代」という言葉がうずをまいている。また、「近代」の前提となる「歴史」や「歴史学」も何かと話題になることが多い。このこと自体は、史学にかかわるものとして歓迎すべきことがらであるけれど、そこで語られるこれらの言葉について、何か違和感のあるのもいつわりのないところである。

「総合」ということについて、「学問が学問を総合するということなど、ないことであろう。学は自らの否定を行ずることができたとき、総合される。それぞれは、よせ集められ、総合の営みを営むことのなかで、自らを超えるものを共通に見出してゆく」のであり、それは「人間の事」としての「真宗」であるといわれている（所報No.2　訓覇曄雄「真宗総合雑観」）。はて、真宗学や哲学は、そして仏教学もそうなのであろうが、総合の学、「人間の事」の学ではなかったのだろうか、と思ったのは私一人だけだろうか。真宗学や哲学が「学」でないのならともかく、それらは総合の学でありながらそれを自己否定して真宗によって総合されるということになる。なるほど、研究所や総合研究が「真宗総合」であるのは真宗を総合的に研究するのでは決してなく、真宗によって総合されるということだと納得した。

けれども、そこに生ずる問題はきわめて重大であるといわざるをえない。第一に、右に感じたように、総合せしめられる対象となる総合の学たる真宗学や哲学とは何なのか、そしてその総合の結果それらはどうなるのか、という問題である。第二に、個別学とされるであろう史学や文学などはどうなるのか、ということであり、それらを総合するものが真宗という宗教であることから、第三に学問と宗教という、古くて新しい問題が生じてくる。西欧における近代学の成立が、学問の宗教からの独立ということを意味していたという通念からすれば、逆の方向であるから、これが古い問題ではなく、新しい問題であるということの意味をどのように理解したらよいのであろうか。

二

近代に成立した諸学は、それぞれ独自の領域と方法をもっている。その故に個別学であるけれど、それらは自己のうちのみで完結するものではない。歴史学もまた人間を対象とする学であるが、その人間は、人間一般というものではなく、歴史的限定を背負った歴史的人間である。その歴史的究明において、人間そのものを発見し、歴史的限定から人間を解放しようとするものが歴史学であるなら、その意味で歴史学もまた総合の学である。このような個別学から総合へという性格は、全ての個別学の目ざすところであろう。こうした個別学は、その営みに徹底することにおいて、その根底から自己を開いていくのである。博綜館に四つの研究室がおかれたのは、従来の16専攻を真宗仏教学・哲学・史学・文学として確立していくことを意味するのであろう。その上に、つまり真に自立した個別学が前提となって始めて、総合が可能になると考える。

自立した個別学は、独自の領域と方法によって、独自の概念を規定していく。同じ言葉を用いたとしても、個別学相互間でその概念を異にする場合が充分に考えられる。こうしたものの一つに「近代」がある。歴史的に、「近代」は歴史のある段階であり、現代においては超えらるべき時代である。その日本における「実際にあった現実に行なわれた近代化とは、天皇制国家が主導した近代化」（所報No.5　福嶋寛隆「日本近代化過程における真宗教団」）に他ならない。日本近代がこのように天皇制であるなら、西欧近代を理念型化した、一般的に用いられる「近代」とはおよそ別のものである。こうしたときに一方で、たとえば清沢満之の近代教学といわれるとき、この「近代」はけっして天皇制を意味するものではなくして、西欧近代をベースにおいたあらまほしき理念型としての「近代」なのである。こうした二つの「近代」概念があるうちで、後者が普遍的な、あるいは総合的なニュアンスで語られるとき、それはイデオロギー以外の何者でもない。天皇制と等置される日本近代という性格を歴史的限界の指摘にすぎないといい、愛情と尊敬をもって日本近代をみよといわれるなら、愛は盲目といわれるだけのことであろう。

ここで二つのことを思い出す。最近読んだ色川大吉著『同時代への挑戦』に関してである。その一つは、その内の「創造的学問を求めて」という講演記録にみえているパラダイムという概念についてである。特定の研究目的、価値意識を共有する研究者集団と、その内から生まれた理論のわくぐみがパラダイムと呼ばれるものであるが、そこには共通の言葉が用いられ、パラダイム外のものには容易に理解しえないという閉鎖性を生みだしてくる。たとえば「近代」を、歴史的概念としてではなく、

＜指定研究＞

そして歴史学

研究員
本学助教授　大桑　斉
（日本仏教史学）

あらまほしき理念型として理解しないことにはこのパラダイムの一員たりえないのである。ここには一つの総合が成立している。けれどもそれは、首座を占める価値観によって、他の価値観が統合され従属せしめられているだけであって、総合ではない。

三

ところで、色川大吉氏といえば、西欧近代とも天皇制近代ともことなる日本の民衆的近代を追求した研究者として著名である。とくに明治１７年の秩父事件における民衆のあり方に注目し、自から居をこの地に移し、地域に根づいた研究活動を行っている。前掲の近著においても、同じ視点から注目すべき提言を行っているので紹介しておきたい。

色川氏は秩父事件を民衆的近代の突出とみるのであるが、それは形態的には軍隊に対して組織的武装をもってあたろうとした点に、秀吉の刀狩以来たえていた民衆の武装を正当化するものとみ、「天朝さまに敵対するから加勢しろ」という言葉に知られるような、明確な反乱を正当化する意識をみることができるという。それはさらに国家は「法律ノ正面ハ曲ゲテモ細民ヲ救済」すべきであるという法と国家への意識を裏打されており、そうした国家と対峙する民衆の自治は「国会ト雖モ之ヲ侵スベカラザル」神聖な不可侵の権利であるという認識に立脚しているとされる。これらは西欧近代を基軸においても充分に近代的なものであることはいうまでもなかろう。しかし、そうした意識は、共同体から分離された西洋近代の個のそれとはことなり、逆に「共同体の中に、人民の生存の権利に関する断固たる意識」の根があると色川氏はいう。ここでいわれる共同体は、きわめて小規模な生活共同体であり、脱落者が一人でも出ればたちまち崩壊の危機にみまわれるようなもので、それはまた、歴史の試練をへて生き残ってきたものであった。かかる共同体はやがてその成員を強靱な個としてきたえあげたが故に、共同体と不可分なところに個の自覚が成立し、これが共同体を支え、近代的意識の母胎となったというのである。

かかる共同体と不可分の、それに支えられた民衆の個の自覚と、それを根拠地とする民衆斗争は、秩父蜂起を最後として天皇制国家におしつぶされる。それと共に、民衆的個の自覚は共同体の内で厳しく自己を律していく内縛の論理に転化され、それを掌握することにおいて天皇制近代国家が形成されるのである。けれども、一方で抑圧された民衆的個の自覚は怨念として凍結されていく。そしてそれは、倒錯した姿でいたるところに噴出してくるのである。色川氏はこうしたものとして深沢七郎の、『楢山節考』の主人公おりん婆さんや、石牟礼道子の『苦海浄土』に出てくる坂上ゆきさんを把えていく。

おりん婆さんは、うば捨山に捨られるという、きわめて非人間的な終末のその日を、指おり数えて待ち、喜々として捨てられていく。坂上ゆきさんは、水俣病の業苦にあえぐなかで、見舞に来た厚生大臣を迎えて「天皇陛下万才」を絶叫するのである。一見、倒錯した把えがたいこれらの姿を色川氏は次のように見る。民衆の精神構造の「中間点から底辺にかけては、さまざまな怨念（中略）がうっ積しています。ところがずっと下まではり付いてしまった、おりん婆さんのようなところまでくると、からっと逆に明るくなる。これは一体どうしたことか、このぐるりと回る円環構造において、一番底にはり付いた部分と対極の所に、民衆はいつの間にか寓話を創った。（中略）その寓話とは、この世がこれほどまでに哀れで、これほどまでに虚偽に満ち、これほどまでに悲惨である限り、あの世には必ず救いがある。彼岸には私たちを救ってくれるものが必ずあるのだと」。捨てられて死ぬことによってあの世の救いを実感したおりん婆さんであり、坂上ゆきさんにとって天皇陛下は「はるばる東京の方から自分を救いにきてくれたこの世の阿弥陀さんなのです」と色川氏はいう。

いままでの歴史学は、そして他の諸学も、こうした民衆の精神構造を把え切ってはいなかった。おりん婆さんや坂上ゆきさんは、おくれた民衆の低俗な怨念を代表するものとして切りすてられてきたのである。「日本近代」の真宗信仰をみる場合でも、ただひたすらに念仏し、来世の往生極楽だけをたのしみに生きる人々の姿をどれだけ把えてきたのであろうか。色川氏の指摘に従えば、それは共同体にきたえられ、支えられて自立した個が、天皇制近代によって打のめされ、倒錯させられた姿ではなかったのか。

こうしたことが、判ってみても仕方がない。問題は、こうしたことを自分の研究の原点としうるかどうかであろう。そこから「近代における真宗の展開」は、新たな視点を与えられてくる。そのとき、「近代真宗」とは何かという問を通して別の真宗が、親鸞が見えてきはしないだろうか。そこから「総合」もまた可能になってくると思う。

＜指定研究＞

『海外仏教研究』研究会報告

北米仏教学資料収集考

研究員
本学専任講師
安富信哉
（真宗学）

日時　昭和57年11月26日(金)16時10分
場所　研究所会議室

承知のように、真宗総合研究所の海外仏教研究班（海仏研）では、北米を中心とする海外の仏教研究の現状を知るための資料を収集している。発足してまもない海仏研の仕事は、仏教研究の国際化の状況が進みつつある今日、いよいよ重要な意義を担いつつある。私は昨年９月１７日から１１月９日までの約２ケ月間、大学より訪米を命ぜられたが、その際とくに研究所から一つのことを依頼された。それは、米国の主要な大学において、仏教研究がどのように行われているか、その状況を知る手懸りとなるような基礎資料を収集せよ、ということであった。このことを念頭に置きながら、私は、いくつかの大学を訪問した。いまそれらの大学を列挙すれば、西海岸では、ハワイ大学、クレアモント大学、カリフォルニア大学（バークレー）、ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）、中部では、ウィスコンシン大学、東海岸では、コロンビア大学、テンプル大学、イエール大学、ハーヴァード大学、ヴァーモント大学である。もちろんこの他にもいくつかの大学を訪れたが、仏教学者にお会いできたのはこれだけである。このうちウィスコンシン大学（マジソン）は、数年前から本学と学術交流を進めている。

私が訪問したこれらの大学の大半は、仏教学で博士号(PhD)を取得することが可能なコースを有している。もちろんこれらの大学には大谷大学のように何十名もの仏教学者がいるわけではない。仏教学の専門家は、せいぜい１名から５名で、その他に隣接分野の学者がコースを指導している。私は、それぞれの大学で仏教学者に面会して、北米仏教学の現状についてお話を伺った。そしてその際、各大学の仏教学の状況を知る手懸りとなるようないくつかの資料を収集しようと努めた。私が手に入れた資料は、数から言えば貧しいものである。残念ながら研究所の期待に十分沿うものではない。しかしその努力が決して徒労であったとは思わない。小稿では、次回への踏み台という意味もあるので、今回の資料収集行にあたって、私がどのようなことに留意し、どのようなことに気づいたか述べてみたい。

第１に私が留意したのは、各大学のカタログの収集である。これは、大谷大学で発行している「学生便覧」「講義概要」にあたるもので、米国の諸大学では、このカタログを毎年あるいは２年に１度発行している。私はこれを訪問大学の学内書店や生協で２ドルから３ドル払って手に入れたが、あるときには教授や事務所の好意で無料で頂いた。なぜカタログが必要なのか。これにはいくつかの理由がある。何よりもこれによって大学の仏教学関係の開講科目や仏教研究が大学のどのデパートメントでなされているかが簡単に分る。承知のように、アメリカで独立した仏教学コースをもっているのは、ウィスコンシン大学のみである。それ以外の大学における仏教研究は、ある大学では東アジア言語学科、ある大学では宗教学科というように、どこかの学科に所属した形で行われている。仏教学者はどこかの学科に配属されて、自分の研究を行っている。したがって、仏教研究の大学における位置づけ、教員スタッフの構成を把握するのに、カタログを調べるということは非常に大切になる。とりわけ大切なのは大学院のカタログである。修士課程・博士課程の講義科目は、各教授の最近の研究の関心がよく分るので、仏教研究の状況を知るひとつの目安となる。しかしカタログが売り切れている場合もあり、私の不注意で学部のカタログのみを求めて、大学院のカタログを手に入れることを忘れたりした場合もあった。

第２に私が留意したのは、各大学の仏教学関係の出版物の情報収集である。仏教学関係の最近の出版物にどのようなものがあるか知ることによって、最近の研究の動向を推察することができる。しかしこれは中々困難な仕事である。ウィスコンシン大学の場合には、最近のアジア研究・仏教研究の出版物のカヴァーをガラス・ケースに陳列して、各教授の業績紹介としている。しかし、私の不注意かもしれぬが、他大学ではこのような例は気付かなかった。もちろん日本とちがって一大学の仏教学者数は少ないから、仏教学関係の出版物の発行は僅かである。しかしコロンビア大学のオリエンタル・クラシクス・翻訳シリーズやハーヴァード

大学のオリエンタル・シリーズには、今後とも眼を配る必要があるだろう。さらにいくつかの大学で出版されているジャーナル類は、個人的に寄贈を受けたが、これは海仏研では欠かせない資料である。

"Journal of the American academy of Religion" はもとより、たとえばハワイ大学発行の "Buddhist-Christian Studies"、カリフォルニア大学発行の "Berkeley Buddhist Series" あるいはウイスコンシン大学発行の "The Journal of the International Association of Buddhist Series" 等々の刊行物である。ユニバーシティ・マイクロフィルムズ・インターナショナル(UMI)からは全米の博士論文のコピーが発行されており、海仏研では、このうち仏教学関係の論文コピーを収集中であるが、シカゴ大学、ハーヴァード大学のみは、UMIから購入できないので、これは大学に直接問い合わせる必要がある。私のハーヴァード大学訪問は、一つはこの目的があった。その他資料を集める過程で、たとえばテンプル大学発行の『北米宗教関係研究者名簿』(1981年刊)のような、思わぬ収穫を得る場合もあった。

第3に留意したことは、各大学の広報資料、パンフレット類の収集である。これは、アジア研究や宗教関係の活動状況を知るためには軽視できない。たとえばハーヴァード大学世界宗教研究センターのパンフレットやイエール大学のアジア研究科のパンフレット、ブリティッシュ・コロンビア大学アジアセンター発行のニュースレター等々。その他、大学のキャンパス・マップから図書館発行のブルティンに至るまで、小物と馬鹿にせずに眼についたものは収集するように努めた。

第4に留意したことは、各教授の研究内容についての資料収集である。もちろんお会いした先生方の好意で、個人的に抜刷や著書を頂戴する場合も何度かあったが、できれば履歴書(curriculum vitae)や著書・論文目論(publication list)のコピーを頂ければもっと好都合である。しかし学者の中には、大して面識のない人に資料を提供することに抵抗のある人もないとは言えないであろう。自分の業績のみならず大学院学生の名簿・研究領域を示す資料を進んで提供して下さる先生もおられたが、事前にこちらの資料収集の目的を相手方に十分理解していただかなくてはならない。

第5に留意したことは、テープ資料の収集である。私は自分自身の英語力に相当の不安があったことと、慌だしいインタヴューの内容を十分にノートすることができないと判断していたので、会見に際しては原則としてカセット・テープで会話の内容を記録するように努めた。テープを聴き直してみると、インタヴューのときには気付かなかった各教授の仏教研究の背景、方法論、問題意識、仏教学生の状況把握等々について再認識できて、まことに興味深い。テープを検討することを通して得られる成果は、予想以上に大きい。もしできうるならば、仏教学を専攻している学生とのディスカッションをテープに収録しておくならば、更にアメリカ仏教学の現状を知る意味で有益であろう。今後テープ・ライブラリーの充実は、意外に実り多いかも知れないと思われる。

第6に留意したことは、これらの大学以外の開教関係資料の収集である。アメリカで真宗がどのような宗教的活動を行っているか端的に知るためには、どのような出版物や広報が発行されているか把握しておかなければならない。北米開教の歴史が古い西本願寺からは、すでに沢山の英文出版物が出されているが、なかには重要でありながら日本で手に入りにくいものも少くない。これらのうち私の入手した書籍は僅かであるが、今後海仏研が北米開教の諸先達の協力を得て、英文仏教(真宗)図書を充実させてゆくことが望まれる。その他広報類では、各寺院から発行されている月報、たとえば『和』(東本願寺ハワイ別院)、『道』(同ロサンゼルス別院)、『シカゴ仏教会報』、『メッター』(ブディスト・スタディ・センター)を過去にさかのぼって収集した。

さて以上、まことに大雑把ではあるが、私の資料収集の状況について報告した。振り返ってみて、その不十分さを反省するとともに、今後収集に出かけられる方々の努力を期待するばかりである。今回の諸大学訪問にあたって、私は、訪米前に手紙によって面会の約束をとりつけ、訪米後に電話によって各先生の日時の都合や会合場所の確認をとり、面会の際にはちょっとしたお土産と真宗総合研究所の「所報」を持参した。とりわけウィスコンシン大学の清田実教授からは私の東部各大学訪問に支障なきよう色々とアドヴァイスを頂き、電話連絡のために研究室を御提供頂いた。また大学院生のウィリアム・カーツ氏は、不馴れな私のために卒先して電話連絡を手伝って下さった。言うまでもないことであるが、資料収集は、各大学のスタッフの協力がえられなければ不可能である。幸い私は、各大学の諸教授、図書館員、大学院学生、それに東本願寺関係寺院の先生方に知遇を得て、暖かい配慮と有益な忠告を受け、まがりなりにも旅程を消化できた。その御厚情に対して改めて深くお礼申し上げたい。なお今回収集した資料は、海仏研におさめた。今後それらを更に整理するとともに、資料内容を検討吟味し海外仏教研究のための一助としたい。その意味では、私の資料収集考は、まだ進行中なのである。

大谷大学真宗総合研究所
昭和58年度「一般研究」選考結果

昭和58年度「一般研究」の選考は、学内応募が出揃った時点で、研究所委員会が開かれ、慎重な審議の結果、次のように決定した。今回は、共同研究3件、個人研究3件、計6件が採用された。来年度でようやく2年目に入る「一般研究」は、その選考結果から、特徴が浮び上ってきたといえよう。それは、方法論的に明確であるか、資料操作と収集の方法がはっきりしている研究だということである。大谷大学の研究所ということで、本学の研究と教育に資する目的に、ただ安易に結びついたものでなく、基礎的な研究か、そうでなければ、将来的に、あくまで学的水準において資するであろうことが、予想されるものであるということである。共同研究の2件の継続は、その研究内容の進捗状況から決定された。その点、個人研究は研究所での研究の機会を多くするため、継続は不採用とされた。また研究員の、カリキュラム上の軽減について、59年度からは、選考を受けたものは必然的になされるよう望まれている。

（A）共同研究

研究代表者	研究テーマ及び研究組織	補助額
小川一乗教授	**「大谷大学所蔵西蔵蔵外文献の歴史的・思想的位置づけに関する研究」** **研究員**　小川一乗（教授）片野道雄（助教授） **嘱託研究員**　ツルティム・ケサン（講師）小谷信千代（助手） **研究補助員**　兵藤一夫（大学院博士課程） （以上いずれも仏教学）	**80万円**
渡辺貞麿教授	**「近代文学における仏教的諸相」** **研究員**　渡辺貞麿（教授）喜多川恒男（専任講師）入部正純（専任講師） 石橋義秀（専任講師） **嘱託研究員**　仲野良一（講師） （以上いずれも国文学）	**100万円**
岩見　至教授	**「外国語教育（学習）の思想」** **研究員**　岩見　至（教授・仏語学）友田孝興（助教授・独文学） 市橋弘道（助教授・英語学）禿　憲仁（専任講師・独語学） 安富信哉（専任講師・真宗学）	**80万円**

（B）個人研究

研究者	研究テーマ及び協力者	補助額
鍵主良敬教授	**「華厳教学に受容された起信論の思想的研究」** **研究員**　鍵主良敬（教授・仏教学） **嘱託研究員**　一色順心（助手・仏教学） **研究補助員**　稲岡智賢（特別研究員） 赤尾栄慶　織田顕祐（いずれも大学院博士課程）	**50万円**
田中圭二郎助教授	**「日系アメリカ人の教育意識に関する研究」**	**50万円**
安藤智信助教授	**「蓮宗宝鑑の研究」** **嘱託研究員**　大内文雄（助手・東洋史学）	**50万円**

〈指定研究〉

『海外仏教研究』

Committee on Overseas Buddhist Studies

—Accomplishments to Date—

Robert F. Rhodes

(研究補助員　ロバート・F・ローズ)

The Committee on Overseas Buddhist Studies (*Kaigai Bukkyo Kenkyu*) was established within the Research Institute for Intergrative Shin Buddhist Studies to foster and facilitate the mutual exchange of ideas between scholars engaged in research on Buddhism within Otani University, and those outside of Japan. It is our belief that such an exchange would enrich the Buddhist studies of both Otani University (and by extension, Buddhism in Japan as a whole) and those of scholars and institutions outside Japan. To fulfill its goals, this group must function in several ways. First, it must be a center in which the latest developments in Buddhist research abroad can be followed, analyzed and introduced to the Japanese academic community. Second, it must be able to introduce noteworthy Japanese research to interested scholars outside Japan. And third, it must provide a setting in which researchers from both inside and outside Japan can personally meet and exchange ideas about topics of mutual interest.

Need it be said that this is a tall order for any organization, and that no one claims that such a system can be created overnight? Simply to keep up with the number of books and articles published in America, Europe and Asia, for example, is a demanding job. Nevertheless, a center capable of handling all of these duties must be created if Otani University is to have a truly vigorous and sustained intellectual exchange with the rest of the world.

The number of things that this study group can, and must, do is endless. It is useless to sit and sigh over the number of things that must be done. Some start must be made. Thus, for practical reasons, during the 1983 academic year, we have compiled a bibliography and created a library of English- language materials concerning Buddhism published from the year 1960 to the present, with special emphasis on those from North America. A major reason for the selection of North America as our focus has been the existence of the exchange program between Otani University and the University of Wisconsin. Under this program, a professor from Otani is invited to Wisconsin every year to study the state of American Buddhist studies and lecture on Buddhism to the students there, while Otani reciprocates by inviting a doctoral candidate from Wisconsin to conduct his dissertation research here. With this annual visit of an Otani professor to America in mind, we have undertaken to compile a bibliography of recent researches into Buddhism published in North America. In doing so, we hoped to understand the central interests and future trends of Buddhist studies on that continent.

In preparing our bibliography, we first examined the various bibliographies devoted to Buddhism as well as Oriental studies and religion in general. Particularly useful were the *Guide to the Buddhist Religion* (Frank E. Reynolds, ed., Boston: G. K. Hall, 1981), the *Bibliography of Asian Studies* (Ann Arbor: Association of Asian Studies), the *International Bibliography of the History of Religions* (Leiden: E. J. Brill) and the *Toyogaku Bunken Ruimoku* (Kyoto: Jinbun Kagaku Kenkyusho). Next we reviewed the major journals likely to contain articles and book reviews of Buddhist topics to augment the list compiled from the bibliographies. As can be imagined, this method of research was exceedingly time-consuming.

The results of our research is now compiled on notecards arranged according to author. In the near future, we hope to arrange a system whereby this information can be retrieved according to title and subject as well. In the ten months that we have been actively collecting this data, we have accumulated about 3,200 cards, filling four drawers in our card file. These include not only books and articles published in North America, but all English-language materials we could find. The amount of material we have gathered far exceeds what we had originally anticipated. We hope to publish our bibliography in book from some time in the future for the benefit of all those engaged in research on Buddhism.

Another of our major concerns, along with the compilation of the bibliography, is to build up a library of important works on Buddhism written in the major Western languages. A well-stocked library of this sort would give professors and students a place where they can freely peruse current Western studies on Buddhism. Again for this academic year, we have concentrated on creating a thorough library of English-langauge materials. We hope that this library will not be confined to studies specifically on Buddhism, but will also contain significant works concerning the religion and culture of India, China, Tibet, Southeast Asia and Japan as well. Furthermore, we have acquired about one hundred copies of doctoral dissertations concerning Buddhist topics presented to American universities. These dissertations should be particularly valuable in helping us keep current about the research and interests of young PhD's.

Although these were the major projects we have undertaken this year, it must also be mentioned that, since the autumn of last year, professor and research assistants of our study group as well as other interested graduate students, have been meeting twice a month to discuss English-language articles on Pure Land and Shin Buddhism. This meeting usually takes the form of one person giving a short synopsis of the article, followed by a general discussion. To date, we have had five meetings. In our latest meeting, held on January 25, Mr. Ichiraku Makoto, a graduate student of the Shin Buddhism Department and a member of our committee, led a discussion on Dr. Minoru Kiyota's analysis and translation of Vasubandhu's *Sukhāvativyūhôpadeśa* (*Jôdoron*) ("Buddhist Devotional Meditation: A Study of the *Sukhāvativyūhôpadeśa*," in Minoru Kiyota ed., *Mahāyāna Buddhist Meditation: Theory and Practice*. Honolulu: University Press of Hawaii, 1978). We hope that discussions of this kind will gradually come to hold a more important role in our study group in the future.

＜指定研究＞

大蔵経学術用語研究の現況

研究補助員 赤尾栄慶
（大学院博士課程・仏教学）

既報のように現在は大正蔵経72・73・74巻（経典番号No.2326～No.2360）における学術用語の索引を編纂中である。72・73巻所入の典籍は主に『華厳五教章』の注釈書であり、74巻のそれは戒律関係のものである。学術用語の研究及び索引編纂作業には、教員から学生までの多くの人員が必要であるが、特に若いエネルギーが結集されねばならない。今回は一色、稲岡、織田及び赤尾の4名が研究補助員の任にあって、本索引作成の直接的作業に参加している。そこで現時点における索引編纂の状況の一端を報告することにしたい。

まず索引編纂の手順を紹介しよう。(1)索引に付すべき用語の選定（線引） (2)選定された用語のカード化 (3)用語の30項目分類 (4)親字の分類 (5)親字の読み決定 (6)五十音配列 (7)原稿化 (8)分類項目別配列 (9)原稿化 (10)解題・検字索引等の整備 (11)出版社へ原稿搬入となり、その後の校正作業を経てはじめて索引として世に出ることとなる。

これらの作業の中で、最初に直面した問題はテキストの問題であった。例えば、No.2342の『華厳五教章見聞鈔』では大正蔵経の底本が不完全であり、本学所蔵の和本と校合してみると後者の方も不完全であることがわかった。そこで両本を合わせて一本のテキストにすれば、かなり両者の欠点が補えるという結論が得られた。又、No.2345の『華厳五教章衍秘鈔』には大きな欠落部分があることも確認された。

このような状況を踏まえつつ抽出された用語をカード化する時や原稿作成時には、学部の学生の援助を仰ぐことになる。漢字と数字の浄写という単調な作業が続くためか、いささか食傷気味になることもあるとのことである。しかし、学術用語の一語一語に接する機会を得ることによって、仏教の奥深さや豊かさに気づかしめられるということもある。

さて今回の索引は本学にとっては初の日本撰述の典籍を扱ったものであるため、いままでになかった新たな問題が生じてきた。抽出されカード化された用語は、原則的に呉音で読みをつけることになっている。しかし、日本撰述の場合には用語の中に和語の人名・寺院名・地名等が多出するのである。例えば、鳥羽天皇、三井寺、大和などは順にトバテンノウ、ミイデラ、ヤマトと読むべきであり、チョウウテンコウ、サンショウジ、ダイワと読む人は皆無であろう。その結果、これらの和語の読みをどのように処理していくかが大きな問題となった。そこで約15万枚の全カードの読みを点検し、呉音よりの見よ項目をつけることによって一応、呉音統一の原則を守りながら、和語の特殊な固有名詞に限っては一般的な読みにして配列することとした。またいわゆる国字については、当然のことながらそのままの読みで配列しなければならない。例えば、栂尾高山寺の「栂」は国字であるので「トガ」としか読めない場合である。

最後に、索引において重要なことは、(1)用語の正確さ、(2)その所在の確かさ、(3)引きやすさの3点に集約されるであろう。特に(1)・(2)におけるミスはその索引にとって致命的である。何分、すべてが手作業なので、なるべく作業を省略することなく何度もチェックできる態勢を整え、校正作業の最後まで決して息を抜かないことが肝要となるわけである。また(3)に関しては、慣用音、漢音、呉音等の様々な読みからも同一字が引けるようにしてその便を計るようにした。限られた人員、限られた時間、限られた頁数などの制約の中ですこしでも納得のできる索引を編纂し、その成果を世に問いつつ、多くの研究者にとって有益な索引にしたいという願いのもとに今日も編纂作業を続けている次第である。

研究所行事

真宗総合研究　研究会

10月以降の研究会は次の通りであった。

11月30日（火）　「真宗・総合・近代，雑観」
本学助教授　大桑斉氏

海外仏教研究　研究会

10月以降の研究会は次の通りであった。

11月26日（金）　「アメリカ仏教学散見」
本学専任講師　安富信哉氏

1月12日（水）　「フランス仏教学の動向、ならびに『全欧日本学会第三次会議』についての管見」
本学教授　白土わか氏

研究所報　第6号
1983年2月20日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
603　京都市北区小山上総町